

続・授業こそコロナ拡大を防ぐセーフティネットだ

著者	安居 光國
雑誌名	論座
巻	2020年4月13日
発行年	2020-04-13
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010193

続・授業こそコロナ拡大を防ぐセーフティネットだ

感染対策を新たな大学授業の改革へと反転させよう

安居光國 室蘭工業大学くらし環境系准教授

都市部を中心に新型コロナウイルスの感染者の増加は収まる気配が見られない。そのため授業開始をゴールデンウィーク後に遅らせた大学が多い。だが実際に授業を再開できるかは未知数だ。感染増加地区から移動してくる大学生に、観察期間を求めず、連休が明けるとすぐにキャンパスに迎え入れることにはリスクを伴うだろう。

4月3日に本サイトで「[授業こそコロナ拡大を防ぐセーフティネットだ](#)」を公表した。中長期的な視点で見ると、大学で授業を開くことが新型コロナの感染拡大を防ぐ効果を持つことを発信した。これを読んだ大学教員から「これまで大学が教育責任を果たすことだけに目を向けていた」「研究はグローバルでも大学は地域によって支えられていることを再認識した」との感想もとても多く寄せられた。だが決して、即座に教室での授業を再開できるわけではない。



各地の大学が相次いで、学内への入構制限やオンライン授業への変更を発表している

また、大学生からは「気を許すと街をブラブラするかもしれないと自分のことを言われたと思った」と正直なコメントもあった。ある方は「すぐに息子に知らせて読ませた」と話された。これらの感想を聞くなかで、いまの大学の授業が昔とは大きく変わっている現状をご存じない方が多いことも知った。これらのことを併せて、続編として論じてみる。

いまでは一変した大学教育の風景

大学生は週に数日しか大学に行かず、教室ではおしゃべりばかりしている……。もしそんなイメージを持っておられたら、それはステレオタイプな描写をするテレビドラマの中だけの世界だと、どうか考え直していただきたい。教授が古いノートをただ淡々と読み上げるような古色蒼然とした情景などは、いまの大学にはない。

ここで、とくに中高年以上の世代のみなさんに向けて、一つ質問してみたいこ

とがある。次の言葉をいくつかご存知だろうか。

GPA 反転授業 アクティブ・ラーニング ファカルティ・デベロップメント アドミッションポリシー カリキュラムポリシー ディプロマポリシー PBL インストラクション・デザイン ラーニングアウトカム キャップ制 ナンバリング ティーチングアシスタント ピアサポート ラーニングコモンズ ルーブリック.....

これらは大学などが取り組んできた教育改革にまつわる用語である。カタカナ語が多いことに、拒絶反応を持たれる方もいるかも知れない。意味がすぐに通じにくいことは確かに残念ではある。だが重要なのは、その内容だ。目指すは教育の質保証である。

たとえば最初の「GPA」はグレード・ポイント・アベレージの略で、近年広がっている成績評価方法だ。国際的に通用する基準であることから、90%以上の大学が導入している。各科目の成績に応じて点数（グレード・ポイント）が与えられ、履修指導や奨学金の基準などに活用されている。

教員が学生に与える単位にも、説明責任を求められる。たとえば講義15時間には、予習15時間と復習15時間が不可欠と考え、これらをもって1単位を与えるため、学生はむやみに時間割がいっぱいになるほど授業を選択できない。この上限値を決める仕組みがキャップ制だ。単位の実質化の一つである。オンライン授業で予習をし、教室で復習する「反転授業」も同様である。

つまり今の大学は、ただ単位をもらうには定期試験だけ合格すればよいわけではない。まずは日々の学習ありき、という実質的な考え方をとる。多くの大学で、教室の入り口には学生証をタッチして出席を記録する装置がある。学んだ成果をこまめに確認する小テストも多くなっている。「学ばざる者は卒業かなわず」である。

オンライン授業だけでよいのか

このように大学は近年、学生の学びに真剣に向き合い、改革を重ねてきた。その中で起きたのが、新型コロナウイルスの感染拡大である。感染予防のためにオンライン授業へ切り替える準備を進めているが、教育の質保証を維持することは限られた予算や設備、時間のなかでは手探り状態だ。週5コマ以上の授業を持っている先生もザラにあり、苦勞は計り知れない。

一方で、その効果は高い。いまどきのオンラインシステムは復習のための録画視聴サービスも備わり、多くの学生たちにとっては「いつでも好きな時間に学べる」というメリットもある。もちろんネットワークの接続時間などを把握でき、出席状況も一目瞭然である。双方向授業であるため、学生たちの表情も見え、質問や議論もできて教室に近い臨場感もある。小テストも課題レポートも可

能だ。教員は、マスクをしていない学生たちの顔をカメラ越しに見られるであろう。整理されていない部屋や化粧をしてない素颜までは、見せてはくれないだろうけど。きっとポストコロナにはオンライン授業がいきなり拡充されるだろう。



学生たちが教室へ戻れるのはいつになるのか

では、オンライン授業だけでよいのか。たとえば東京大学は3月31日、学生に向けて「対面での講義は最小限とし、オンライン化を奨励し推進する」との方針を示した。急激な感染者数の増加や、3月25日の東京都知事による外出自粛要請等を踏まえ、見直しを検討したという。その結果として、学生の安全確保を最優先するために4月以降に開講する授業を当面の間はオンライン授業のみとした。

ネットワークは世界中に張り巡らされているから、オンライン授業だけならどこでも受講が出来る。だがこれは、場合によっては逆効果にもなりかねない。旅行をしても避難した帰省先の実家でも、授業を受けられるのだ。そのため学生が移動することで感染拡大のつながるのではないかと、といった不安や懸念も生まれるだろう。オンライン学習や授業のライブ視聴を利用する学生の急増で、回線・ネットワークの混雑など地域ごとの課題もある。大災害のときにつながりにくったことを思い出す。

また、授業の中には演習・実習・実験など、オンライン化が難しいものもある。だから重要なのは、オンライン授業と教室での授業の組み合わせだ。これを工夫と努力によって安全に実施できれば、学生を大学の通学圏にとどめる効果が高まり、穏やかな行動抑制になる。地域の不安を少しでも小さくすることができるだろう。ただしクラスターをつくらないために教室再開を焦ってはいけない。あらためて東京大学のメッセージを読んでみれば、あくまでもオンライン授業は緊急避難の手段だという考えがにじみ出ていることが分かるはずだ。

不安な新入生の「コロナうつ」

もちろん大学構内は、教室だけでなく学食、ロビー、自習室、図書室など「3つの密」が生まれる場所があまりに多い。これらをどのように運営するかは、慎重に検討する必要がある。通学の電車やバスも感染リスクが高いから、状況に応じて判断せねばならない。

不安はほかにもある。オンライン授業だけではとりわけ新入生に対するオリエンテーションが不十分になる。学友と話す機会が乏しくなり、大学で学ぶ意義を感じられずに気持ちが塞ぎ、「コロナうつ」になるかもしれない。同様のことは、テレワークをする会社員や、小中学校が休校した児童・生徒たちにもすでに見られている。



近畿大はネット中継の「サイバー入学式」に。参列者のいないホールで宣誓する新入生=2020年4月4日、大阪府東大阪市、細川卓撮影

若くて元気そうに見える大学生でも、オンライン授業だけでなく、学生同士が画面を通し、次第にわずかな時間でも会ってたわいもない会話をする 것도大事である。自分一人が大変な思いをしているのではないお互いのためである、という思いを共有できるだろう。新型コロナウイルスに対抗する長期戦略の一つと考える。

感染対策を考えることも教育

これまでも専門家会議やマスコミが社会に向けて、日常の行動変容を求めてきた。だが若い世代には、感染への適切な警戒心を伝えることが難しかったとも言われている。ましてや横浜市立市民病院や慶応大学病院の研修医がこの時期に飲み会やカラオケに出かけて感染したことは、知行不一致の印象も与える。今後、大学教員たちが大声で感染症リテラシーを高めることを訴えても、果たして聞いてもらえるだろうか。

むしろ学生たちに、自らの力で考えて行動してもらえようような機会をつくるほうがよい。

先ほど取り上げた教育用語のなかに、「PBL」があった。これはProblem Based Learningの略で、課題解決の方法を考える授業のことである。さまざまな場面設定の中で、どのような行動や解決方法があるかを学生自身が調査し、検討して提案する。もちろん案は一つではなく、最悪の結果をもたらすものからより好ましいものまで、さまざまあるだろう。どう行動すればどのような結果を生むかを考えることは、学生たちに必要なスキルである。これに実践的に取り組むのである。

例えば「学食が混雑しない方法」「不器用な学生でもマスクを自作する方法」「ひとりで14日間自粛する方法」などはどうだろうか。あるいは、同じように休校を強いられている子どもたちのために、「新型コロナ行動ボードゲームやアプリを作る」などもある。筆者は研究室の学生に「研究室の対策案」を作るように課題を出した。これも「TeachingからLearning」のパラダイムシフトである。